

流暢さに注目した音読活動の提案

発表者：黒崎 亜美・黒崎 誠（ラボ日本語教育研修所）

1. はじめに

近年、音声教育研究は盛んで、プロソディグラフ（河野・串田・築地・松崎 2004）など、音声を視覚化する教材を活用する試み、またイントネーション情報を文理解につなげる研究（江田・内藤・平野 2009）など、イントネーションに対する注目度は高い。しかし、発音、特にイントネーションにおいてはその正確さが重要視され、滑らかさ・流暢さを加えた実践的練習などの研究は多くは見られない。

実際、学習者の発音の中には、単音の発音、拍、イントネーションなどは正しいが、滑らかではなく、自然さに欠け、日本語として違和感を与えてしまうものも多く見られる。これでは意思伝達の手段であるはずの発話が、正しく相手に伝わらないこともしばしば出てくることが考えられる。

そこで、本稿では、発音の正確さだけではなく、滑らかさ、流暢さにも注目した活動について考え、その実践内容を報告する

2. 先行研究

Nation & Newton(2009)は、第二言語習得において、Fluency（流暢さ、滑らかさ）の重要性に注目し、Accuracy（正確さ）との両立を強調するとともに、両技能をバランスよく伸ばすための活動をカリキュラムに取り入れることを提案している。

Nation & Newton(2009)は、“4/3/2 technique”と名づけられた活動を提案している。すなわち、ある長さの文章を 4 分、3 分、2 分と次第に制限時間を短くしながら音読する活動である。その際、最初の 4 分間で読むことのできた分量を記録しておき、3 分、2 分と時間が短くなっても同じ分量を読み切ることを目標とする。それによって、Fluency（流暢さ、滑らかさ）を身につけようとする練習である。

3. 実践報告

本稿では、Nation & Newton(2009)の提案を受け、日本語の授業で実際に行えるように応用した『4・3・2 音読』という授業の実践報告をする。この授業では

- ① 聞き手に伝わる正しい発音ができる
- ② 文レベルで、滑らかな発音ができる

という 2 点を目的とした。

3.1. クラスの概要

授業は、中級（学習時間 400 時間以上）から上級（最長 1600 時間終了）の各レベルで実施した。本稿では、その中から特に上級クラスで行なった授業を報告する。本報告における上級クラスの在籍学習者数は 11 名（韓国人男性 3 名、韓国人女性 7 名、中国人女性 1 名）で、全員日本語能力試験 N 1 合格者である。授業実施期間は 3 ヶ月で、実施回数は 8 回（1 回 45 分）である。

3.2 授業の概要

3.2.1 各授業の流れ

ラボ日本語教育研修所（以下ラボ）では、Nation & Newton(2009)の”4/3/2 technique”を参考に以下の流れで音読授業を行った。

- 1) 難易度がほぼ同レベルの 2 つの文章を用意する。
(上級クラスでは字数 700~800 字程度で、漢字含有率は 20~30% の文章を用意した。
また、一読でほぼ意味理解が可能なものを選んだ)
- 2) クラスを A と B の 2 グループに分け、それぞれに別の文章を渡す。
- 3) 5 分ほど学習者に時間を与える。その間に各学習者は漢字の読み方などを調べ、音読の練習をする。
- 4) A グループの学習者 1 名と B グループの学習者 1 名をペアにする。
- 5) A グループの学習者がペアである B グループの学習者に 4 分間音読をする。次に B グループの学習者がペアである A グループの学習者に 4 分間音読をする。
- 6) 1 分間のインターバルをとる。学習者は漢字の読みなどを再度確認する。
- 7) ペアを変える。
- 8) A グループの学習者が新しいペアである B グループの学習者に 3 分間音読をする。次に B グループの学習者が新しいペアである A グループの学習者に 3 分間音読をする。
- 9) 再度 1 分間のインターバルをとる。学習者は漢字の読みなどを再度確認する。
- 10) ペアを変える。
- 11) A グループの学習者が新しいペアである B グループの学習者に 2 分間音読をする。次に B グループの学習者が新しいペアである A グループの学習者に 2 分間音読をする。
- 12) A グループの学習者が音読した文章に関して、B グループの学習者に質問して内容を確認する。次に、B グループの学習者が音読した文章に関して、A グループの学習者に質問して内容を確認する。

3.2.2 授業で取り上げた文章の概要

本稿では、2010 年秋学期（期間 2010 年 10 月 12 日～2010 年 12 月 18 日）に行った授業実践を報告する。本実践で扱った文章の概要は以下のとおりである。

- 第 1・2 回 : 「What's New」『日経トレンディ 7 月号』（平均文字数 534 文字）
- 第 3・4 回 : 「新手みやげを買いに 東京篇」より（京阪神エルマガジン社）
（平均文字数 809 文字）
- 第 5・6 回 : 「新手みやげを買いに 東京篇」より（京阪神エルマガジン社）
（平均文字数 809 文字）
- 第 7・8 回 : 「デジタルの知性 デザインの感性」『pen 2010.12.15 No.281』
（平均文字数 942 文字）

第 1、2 回目の授業では雑誌『日経トレンディ』の記事を使用した。長さ・漢字含有率が適当であること、聞き手である学習者がメモをとりやすい、新商品の紹介等の内容であることがこの記事を使用した理由である。

しかし、実際に授業を行ってみると、第 1 回は 500 字程度の文章で分量が適当だったが、第 2 回目ではやや短く感じられるようになってしまった。学習者がやり方に慣れ、4 分間で余裕を持って読み切ってしまったのである。そこで、第 3 回以降の授業では大幅に文字数を多くした。

3.3. 評価

この授業はあくまでも「トレーニング」としての位置づけにあるため、教師が成績をつけるという形での評価は行わなかった。ただし、クラス内で「どのように読むと、相手に伝わりやすいのか」「文章にどのような書き込みをすると、音読には効果的なのか」などを学習者から意見を出してもらい、クラス内で共有する時間をとった。

3.4. 授業考察

授業最終日（第 8 回）に学習者に対してアンケートを行なった。学習者には以下の 10 項目の中から当てはまると思うことを選ぶように求めた（複数回答）。

この結果、学習者からは、「漢字の読みが正しく発音できた」「聞き取りやすいように文の区切り方に気がつけた」などの正確さを意識した声が多く聞かれた。

表 1. 学習者に行なったアンケート項目（複数回答）

項目	回答者数
1 漢字の読みが正しく発音できた	7
2 自分の苦手な発音を意識した	3
3 カタカナが正しく発音できた	2
4 イントネーションに気がつけた	3
5 長音や撥音などが正しく発音できた	3
6 聞き取りやすいように文の区切り方に気がつけた	8
7 漢字が推測して読めるようになった	3
8 文章が滑らかに読めるようになった	4
9 読みながら意味を理解するスピードが速くなった	4
10 文章を目でとらえるスピードが速くなった	3

また、上記 10 項目以外に授業を終えて気をつけるようになったことやできるようになったことを自由回答により求めた結果、「意味の内容で、フレーズの途中で切れないようにした」「強く発音する言葉とそうではない言葉を意識する」などの流暢さにつながるのではないかとされる声が聞かれた。

教師の観察からは、固有名詞をゆっくり発音する、相手がメモをとる様子を見ながら読むスピードをコントロールするなどの行動が見られた。これは、特定の聞き手を意識した上での行動と思われる。このことから、正確に読むことだけに意識を向けた従来の音読とは異なり、この音読活動には話し手の聞き手への配慮を自然な形で引き出す効果があることが分かった。1 対 1 のペアにして聞き手の存在を明確にしたことが、この効果を引き出したと考えている。また、この効果を引き出したことで、学習者アンケートに見られたように、正確さとともに流暢さにも意識を向けることができたのではないかと考えている。

4. まとめ・今後の課題

今後の課題として、どのような文章がこの活動に向いているのか、漢字含有率ほどの程度のものがいいのかといった文章に関する検証、およびどの程度の継続により効果が現れるのかといった活動に関する検証が必要である。これは学習者のレベルや、学習時間などによっても差があるのではないかと考える。また、「発音の正確さ」ではなく「発音の滑らかさ」を評価する方法についても検討する必要がある。発音の正しさではなく、「滑らかさ」、また「伝わりやすさ」といったものをどのように測り、またどのように評価したらいいのかは、今後の最も大きい課題である。

【参考文献】

- 江田早苗・内藤由香・平野絵里香 (2009) 「学習者によるイントネーション知覚と意味理解のストラテジー ―音声教育への応用と提言―」『日本語教育』143 号, 48-59
- 河野俊之・串田真知子・築地伸美・松崎寛 (2004) 『1 日 10 分の発音練習』くろしお出版
- Nation, I. S. P. & Newton J. (2009) *Teaching ESL/EFL listening and speaking*. Routledge, Taylor & Francis.